

柳原三佳の 新 一瞬の真実

FILE NO.038

高知“白バイ死亡”事件

- 取材・文 柳原三佳 <http://www.mika-y.com/>
- イラスト 佳岡広澄

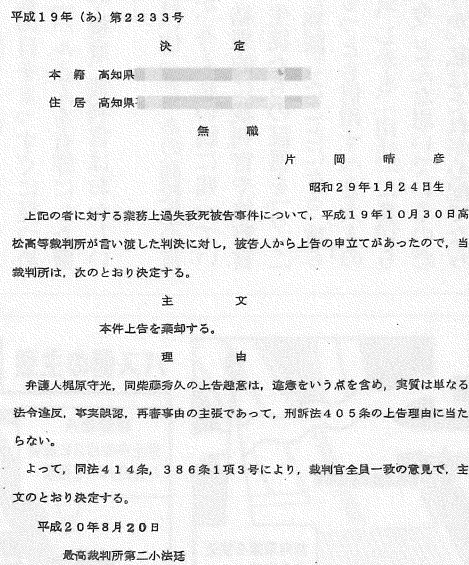
■やなぎはらみか
バイク雑誌の編集記者を経てフリーに。交通事故を主なテーマに執筆する他、TV出演、講演活動も行う。本誌や『週刊朝日』に連載した交通事故の告発ルポは、自賠責制度の大改正につながり話題を呼んだ。また検視や司法解剖に関する取材も精力的に行い、日本の死因究明のひずみを鋭く指摘している。最新刊『自動車保険の落とし穴』『焼かれる前に語れ』『交通事故被害者は二度泣かされる』など著書多数。自らも限定解除のナナハンライダーである。



バスを運転していた片岡氏は「右折待ちで停止中に衝突された」と無罪を主張したが、実刑判決は確定してしまっただ。

「私はあの日、そのようなスリップ痕を見ていません。他の知人も同様です。また、白バイが

最高裁
決定速報!



本件上告を棄却する。理由 弁護人堀原守光、同僚藤野弘の上告趣意は、趣意をいう点を含め、実質は単なる法令違反、事実誤認、再審事由の主張であって、刑法第405条の上告理由に当たらない。よって、同法414条、386条1項3号により、裁判官全員一致の意見で、本文のとおり決定する。平成20年8月20日 最高裁判所第二小法廷

「私は止まっていた。急ブレーキなどかけていない!」

最高裁がバス運転手の主張を退け、上告棄却→実刑確定!

裁判官はなぜ子供たちの証言を無視できたのか?

本誌1月号で取り上げた交通事故を覚えているだろうか? そう、高知県で発生したスクールバスと白バイの衝突事故だ。「私は右折待ちで止まっていた。急ブレーキなどかけていない!」事故直後からそう主張していたにもかかわらず、逮捕・拘留され、一審、二審とも実刑の有罪判決を受けたバスの運転手は、その後も無罪を主張。今年1月、最高裁に上告していた。しかし、8月22日、ついにその結論が下された。

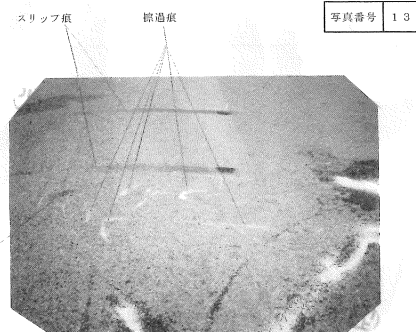
「8月22日午後3時頃私が自宅に戻ると、自宅に最高裁から封書が届いていました。結果は、上告棄却、つまり何も審理されることなく、門前払いでした。私自身、ある程度の覚悟はできていたのですが、驚きはしませんでしたが、女房は封書を手にしたとき、思わず震えたと話していました……」
電話の向こうでそう語るのは、高知県「淀川町に住む、元スクールバス運転手の片岡晴彦さん(54)だ。
片岡さんの手元に届いたのは、最高裁第2小法廷が下した、平成20年8月20日付の「上告棄却」の決定書計3枚(写真左)。つまり、「業務上過失致死被告事件」について、片岡さんの有罪が確定した、という正式な通知だ。
刑事裁判の有罪率99.9%と言われる昨今、最高裁で結果をくつがえすことは針の穴に糸を通すより難しい……ということも、再三耳にしてよくわかってはいたつもりだが、実際にこれも簡単に門前払いされてしまうと、
「裁判ってなんのためにあるのだろうか? こんなに疑わし

い証拠だけで、ひとりの人間を犯罪者に仕立て上げてしまうのか……」
毎日ハンドルを握る一国民として、不安を通り越し、恐ろしさを感じざるをえなかった。片岡さんは、すでに高知地裁と高松高裁で、いずれも禁錮1年4ヶ月の実刑判決を受けている。つまり、今回の最高裁の決定は、「ファイナルアンサー」。あとは、刑務所に収監されるのを待つしかないのだ。
ちなみに、片岡さんにとって人身事故は今回の事故が初めてだという。私はこれまで、死人に口なし的な処理をされ、証拠を無視して一方的に過失を押し付けられた交通事故をたくさん取材してきたが、こうしたドライバーに対していきなり「実刑」という厳しい判決が下されたのは初めてだった。
私は、なんと声をかけていいのか戸惑いながらも、こうたずねた。
「封筒の中には通知書以外に何か入っていたんですか?」
片岡さんは落ち着いた様子でこう答えた。
「いや、通知書3枚だけでした」
「今後、片岡さんはどうなるの

か、そうした説明は?」
「今のところ、何もありません。いったいどうなるのか、先のことは全くわからないんです」
「たくさんの人たちが片岡さんの無罪を確信して支援してくれましたが、証拠を何も見ないで判断されるなんて、本当に悔しいですね」
「そうですね、ひっくり返すことは難しいとは思っていましたが、悔しいです。どうせこんな判断になるなら、もっと早く結果を通知して欲しかったですね……」
上告したのは今年の1月8日。間もなく8ヶ月が経とうとしている。
「バスは止まっていた!」
かき消された生徒たちの訴え
事故は、2006年3月3日午後2時34分、高知県吾川郡春野町の国道で発生した。
国道沿いにあるレストランの駐車場から土佐市方面へ右折しようとしたスクールバスの右前角に、右方向から直進してきた高知県警交通機動隊の白バイが衝突。運転していた隊員(当時26)はその衝撃で道路

に投げ出され死亡した。(70ページ参照)。バスには片岡運転手のほか、卒業遠足に出かけていた中学3年生22名と引率の教師が乗っていたが、けが人はなかった。
片岡氏は業務上過失致傷の疑いで、現場で即逮捕され、そのまま3日間拘留。2006年6月には免許取り消しの行政処分を受け、同年11月には業務上過失致死罪で正式起訴された。
07年10月30日、高松高裁の柴田秀樹裁判官は、
「現場にはバス前輪のスリップ痕(長さ11.2m)があり、警察官が捏造した疑いは全くない。被告が右方の確認を十分にしていれば、衝突を容易に避けることができた」として、一審の高知地裁判決を全面的に支持。片岡さんに禁錮1年4ヶ月の実刑判決を言い渡した。しかし、片岡さんは、この判決にどうしても納得できず、無罪を主張して最高裁に上告していたのだ。

バスは動いていたのか、それとも止まっていたのか?
片岡さんは初めて私に連絡されてきたときから、ずっとこう訴えていた。
「検察官から黒々とした2本のブレーキ痕の写真を初めて見せられたのは事故から8ヶ月後のことでした。そのときは、一瞬頭の中が真っ白になりました。私は決して、急ブレーキをかけるような運転はしていません。右折をしようと停止していたところ、突然衝突されたのです。ブレーキ痕などつくはずはないのですが……」
そもそも、乗客20人以上を乗せている総重量10トンの大型バスが、「一旦停止後、6〜5m進行して急ブレーキをかけ、1.1mの真っ黒なスリップ痕をつける」なんてことがありうるのだろうか? しかも、バスにはABSが装備されているのだ。
事故から3時間後現場に駆けつけた目撃者は驚いた様子でこう語った。
「私はあの日、そのようなスリップ痕を見ていません。他の知人も同様です。また、白バイが



警察が実況見分時に撮影していた「バスのスリッパ痕」。片岡さんの支援者らが修理済みのバス(実車=ABS装備)を使って制動実験をおこなったところ、10キロの速度で急ブレーキをかけてもブレーキ痕はほとんど残らなかった。片岡さんは「私は止まっていたのだからブレーキ痕がつかはずはない。捜査機関による捏造だ」と主張していた。

ある青年が亡くなられてい... 運転手の生活が破壊されまし... 私はいくらなられた白バイ隊員を責めたり、非難つもりは毛頭ありません。(中略)私は、ご遺族を含めて世の人達に真実を知ってもらいたいと考えています。事故は、特に死亡事故になると加害者、被害者ともに苦しいものです。恨み恨まれるよりも事実を受け入れることがその苦しみよりぬけだす方法だと思えます...

片岡さんの支援者によるブ... 『この交通事故で一人の未来...』

私は眠れないままにこんな... ことを書いて... いるが、片岡さん夫婦は今頃新聞配達中... なんとも... 怒りを通... り過ぎて悲し... いじゃねえか... 理不尽っての... はこういうこ... とを言うんだ... ろう。また、今... 日から、だ...

衝突した位置も実際とはまる... で違つたのです。これは明らか... 捏造です。許されることではあ... りません... では、事故時にこのバスに乗... 車していた中学3年生の生徒... たちは、その瞬間、どう感じた... のか? 私は高知へ取材に行... ったとき、直接会って話を聞いて... みたのだが、その生徒ははっ... きりとした口調でこう答えた... 「バスは間違いなく止まっ... ていました。急ブレーキのシヨッ... クなどはまったくなく、衝突の... 衝撃もそれほど大きなものでは... なかったのです。私たちはは... らく何が起つたのかかわり... ません。ハルさん(片岡... さんの愛称)を有罪にした警察... や検察、裁判官はおかしいと思... います」取材時・高校2年の... 生徒

片岡さんの支援者によるブ... 『この交通事故で一人の未来...』

~日本の真ん中 群馬から発信!~ 秋の交通安全推進ツーリング

今年もピースロード122を開催します!

ライダーのみなさん、ご自身のライディングテクニックとマシンの性能は同等でしょうか? 心のブレーキを持っていますか? 今、私たちは、「ピースサインを交し合えるような、ゆとりを持った走りをしてようよ」と呼びかけています。

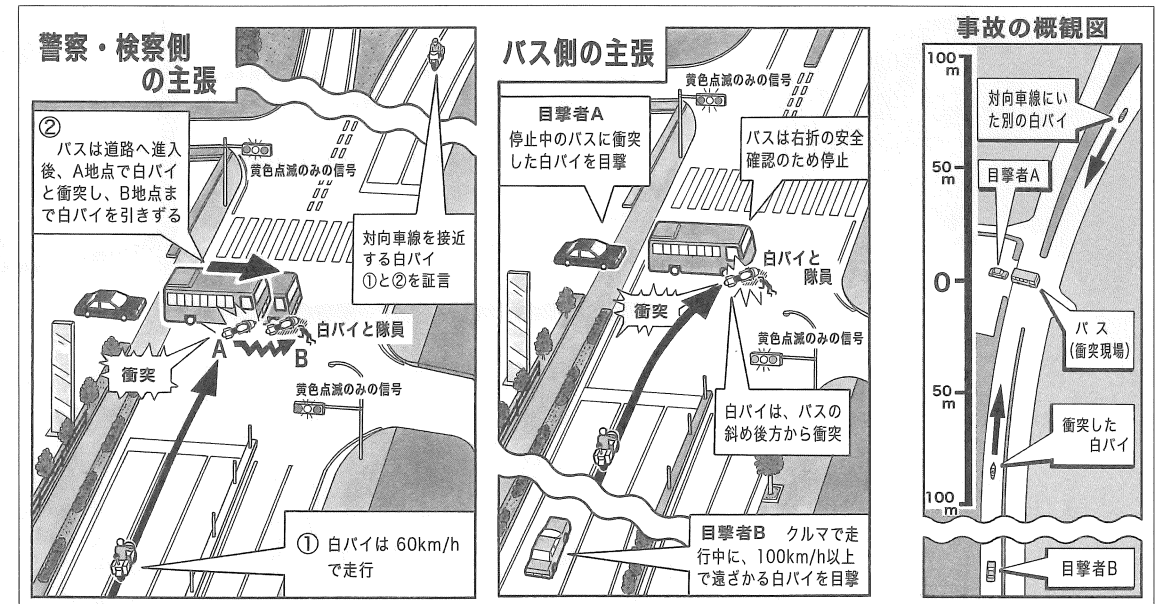
混合交通の危険な道路で、ライダーだけでなく、ドライバーや歩行者も、互いにピースサインを交し合えるような意思の疎通を図り、ロードコミュニケーションの輪をつなげよう!

そんな思いをアピールするツーリングを開催いたします。みなさま、初秋のひととき、ピースサインを送りながら、ぜひ一緒に走りませんか?

- 日時 2008年9月14日(日) 午前10時より受付
- 場所 集合:群馬県桐生競艇場北駐車場
- 内容 交通安全推進ツーリング。桐生競艇場駐車場から足尾ダムまで【行き交うライダーやドライバーとコミュニケーションを交わす一日】
- 参加協力募金500円(ゆいピーバンダナ配布)
- 後夜祭 9月14日 17時より。群馬県みどり市「小平の里キャンプ場」参加費5000円/宿泊の場合は4800円プラス(バンガロー泊)
- 問い合わせ、お申し込みはこちら <http://www.geocities.jp/kazenomessage/pcptims.html>
ゆいハートピースコミュニケーションプロジェクト事務局
山田 穂子 群馬県桐生市菱町3-2129-1 バイクショップ・はんぐおん

透報! 熊本・下川事件も敗訴

5月30日の国会でも取り上げられた「下川事件」(熊本で発生したバイクと乗用車の衝突死亡事故)。遺族は、『熊本県警が虚偽の実況見分調書を作成したため死亡した息子に一方的な過失が問われ、精神的苦痛を被った』として熊本県を相手に損害賠償を求めていたが、8月25日、東京地裁は下川さんの訴えを全て退ける判決を下した。原告で父親の下川正和さんは、「残念な結果ですがこれが現実です。裁判官にはこちらが出した客観的な証拠に対して具体的な理由を示した上で否定してもらいたいと思います」と、控訴の意向を明らかにした。引き続きレポートしていきたい。



警察・検察側は「バスが右側の確認を怠り、時速約10キロで国道を横切ろうとした際、右側から直進してきた白バイに気づかず衝突。その後急ブレーキをかけて停止したとしている。白バイの速度については、国道を対向していた同僚の白バイ隊員の証言を全面的に採用した。一方、バス側は、「右側の安全を十分に確認した上でゆっくりと交差点中央まで進行し、右折するため通過車両が途切れるのを待ちながら停止しているときに、突然白バイに衝突された」と供述。両者の主張は真つ向から対立していた。